愛媛大学教育学部紀要　第54巻　第1号　21～31　2007

対自的対他的安心感は希望に肯定的な影響を与える

（教育心理学研究室）　豊　廣　隼　人
（教育心理学研究室）　渡　辺　弘　純

The feelings of security toward self and others have positive effects on the hope

Hayato TOYOHIRO *and* Hirozumi WATANABE

（平成19年6月8日受理）

問　題

教育の現場で、自己肯定感という言葉がよく用いられてきた時期があり、現在も、その流れを引き継いでいる（たとえば、今野、2001：上原、2005など）。そこには、「生きる力」（文部省編、1996）の基盤に「自己肯定感」を置く枠組みがある。

自己肯定感とは、一体何か、その言葉には、どのような内容が担わされているのであろうか。一般には、自己についての肯定的な感覚（a positive sense of self ）と考えられ、自己の存在感、すなわち、他者に取って代わることのできない、かけがえのない存在として、ありのままの自分を自覚することであるが、それに留まらず、自己の有能感や効力感、自信や充実感、他者からの肯定的評価・承認、あるいは、他者と比較して、自分自身に値打ちがあると感じることまで、多様な内容が込められている。「自分のことが好きか」に対する回答をもって自己肯定感とする立場もある（深谷（監）、2001）。ここでは、自己受容との共通性が指摘される。最近は、Feelings of Self-Affirmation [*1]（高橋、2002：樋口・松浦、2003）の日本語訳としても使われている。しかし、従来、「生きる力」と関わって教育の現場において使用されてきた自己肯定感は、Self-Esteem [*2]の日本語訳であると受け止められてきた（高垣、2004、2006）。Self-Esteemは、通常、心理学においては、自尊感情や自尊心と日本語訳されることが多い。場合によっては、自己価値とか、セルフ・エスティーム（遠藤・井上・蘭、1992）と訳されていることも少なくない。Self-Esteemは、心理学において古くから検討されてきた概念であるが、ローゼンバーグ（Rosenberg、1965）以来、数多くの実証的研究が蓄積されるようになってきた。そして、彼が開発したSelf-Esteem（自尊感情）の測定尺度は、現在でもなお、代表的な信頼できる尺度として、世界中で使用され続けられている。たとえば、中国、アメリカ、スウェーデン、及び日本の子どもの「自信力」について比較検討した河地（2003）も、この尺度を使っている。

自己肯定感が注目されてきた背景には、わが国の児童生徒が他の国に比べて、きわめて低い水準にあることが示されるところにある。先の河地の研究でも、質問紙調査ばかりでなく、インタビュー調査でも、これが明瞭に認められる。日本青少年研究所（2001、2002）が行った一連の調査でも、一貫して、日本の子どもが自信を持っていないことが示されている。たとえば、「将来の私は今より立派になっているか」との質問に対して、韓国やアメリカやフランスの子どもに比べて、最も否定的な回答を行っているし、アメリカや中国の高校生より、「自分は駄目な人間だと思うことがある」と回答する比率がは

1　アメリカ心理学会の辞書（VandenBos, G. R.（Ed.）, 2006）によれば、self-affirmationは、any behavior by which a person expresses a positive attitude toward his or her self, often by a positive assertion of his or her values, attributes, or group memberships.と説明されている。また、樋口・松浦（2002）の自己肯定感尺度は、自律（autonomy）、自信（confidence）、信頼（reliance）、及び過去受容（acceptance of the past）から構成されている。

2　同上の辞書では、the degree to which the qualities and characteristics contained in one's SELF-CONCEPT are perceived to be positive. It reflects a person's physical self-image, view of his or her accomplishments and capabilities, and values and perceived success in living up to them, as well as the ways in which others view and respond to that person.

るかに高く、「計画をやり遂げる自信がある」と回答する比率がかなり低いことが報告されている。われわれの調査(渡辺、2003：渡辺ほか、2004：Watanabe & Crystal, 2006)でも、中国やアメリカの子どもに比して、自己への信頼がきわめて低いことが確認されている。したがって、教育現場では、この低い水準にある自己肯定感を高めるための実践が盛んに行われてきたのである。

しかし、高垣(2004、2006)は、一般の自己肯定感のとらえ方に疑問を呈し、彼独自の「自己肯定感」の考え方を提案している。すなわち、自己肯定感には、競争社会・市場原理の支配する社会の文脈のなかで、売り物になる能力や性質を持っているという感覚(=他者と比較して自分の方が値打ちがあるという感覚)、あるいは、他者と比較しない場合でも、自分には値打ちがあるという感覚が含意されていることを問題にする。そして、今日の若者において、自分に「価値」があると感じられない場合には、親や先生や友人などを含む他者から「見捨てられる」と感じるところに問題があると展開する。逆から辿れば、子どもに「価値」があるから「愛する」という考え方が、無意識的にせよ、親や大人たち、あるいは友人たちを支配していることが問題にされるのである。本来の「自己肯定感」は、自分の価値の有無とは関連がないものであり、無条件的に、自己の存在自体をそのまま受け入れること、彼の用語に従えば「自分が自分であって大丈夫」という感覚なのである。すなわち、「大きな存在」に身をゆだねているという「安心感」、失敗してもゆるされ、「大丈夫」と感じる体験から生じる感覚が、彼のいう共生的・共感的な「自己肯定感」である。無条件的な受容の感覚とでも形容されるものである。

われわれは、既に、高垣の独自な「自己肯定感」の考え方が、エリクソンら(2001)の基本的信頼感と共通する側面を持つことについて指摘してきた(渡辺、2005)。そして、彼の考え方に同意した上で、特定の内容が込められている自己肯定感という用語に代えて、「自己安心感」を使用することを提案した。さらに、ここでは、エリクソン(Erikson,1959)が、基本的信頼感に自己信頼と他者信頼の感覚の統合的な内容を込めたことにも学んで、対自的対他的安心感として、発展的な表現を採用したいと考える。ただし、エリクソンにおける自己信頼には、価値的な色彩があるので、対自的安心感には、むしろ、ロジャーズ(Rogers,1951,1959)の自己受容を含意する。いうまでもなく、この自己受容は、上田(1996)のいう「あきらめ」としての自己受容とは似て非なるものであり、否定的な体験であっても、その体験をそのまま受け入れるということではあるが、「あきらめ」て受け入れるのではなく、その体験に「開かれている」という意味においてである。

わが国では、質問紙やインタビューへの回答において、児童生徒の自己肯定感が低いという事実に問題がないわけではないが、その根底にあると想定される対自的対他的安心感の喪失が、より一層深刻な問題を孕んでいると指摘したいのである。

この研究では、上記のような意味を担う尺度がないので、まず、(1)試行的に、暫定的な対自的対他的安心感尺度の作成を試みる。次いで、(2)関連すると考えられる他の尺度との関係を検討する。すなわち、社会的比較志向性尺度(外山、2002)、自尊感情尺度(山本ら、1982)、楽観主義尺度(中村ら、2000)、及び自己受容尺度(山田、2003)との関係を検討する。そこでは、社会的比較志向性や悲観主義とは負の、自尊感情や楽観主義や自己受容とは正の関係が想定される。この検討は、暫定的な対自的対他的安心感尺度の構成概念的妥当性の検討としても位置づけられる。その上で、(3)対自的対他的安心感が希望の規定因と成り得るかどうかを吟味する。なお、ここで取り扱う希望の概念としては、北村(1983)の定義的表現を採用する。彼は、「希望は来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情である」として、希望について検討している。北村の概念をもとに行われた希望についての実証的研究が非常に少ない[*3]ため、希望についても新しい尺度を構成して、検討を進めることにする。北村とは異なる一般的意味での希望ではあるが、大学生を含む日本の児童・青年における希望の喪失は、自己肯定感の低い水準と同様、多くの人々が憂慮するところとなっている。われわれが、敢えて希望を取り上げて検討するのは、希望の喪失の基底に、対自的対他的安心感の問題があると仮定するからに他な

3　わが国では、大橋(2002a, b)によるリッカート法や自由記述の質問紙を用いた研究やインタビューによる研究があるにとどまっている。

らない(渡辺、2005)。

方　法

1.調査への協力者

地方国立大学の大学生、男性135名、女性122名、計257名が、調査への協力者となった。そのうち、教育学部からの協力者が、112名であり、理学部・工学部・農学部の理系学部からの協力者が、145名であった。2年生と3年生がほとんどで、平均年齢は、20.40歳、標準偏差1.48で、19～21歳が89％を占めていた。

2.調査内容の構成

調査は、質問紙へ回答する形式で実施された。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)対自的対他的安心感を構成する項目群、(3)自尊感情尺度、(4)社会的比較志向性尺度、(5)楽観主義尺度、(6)自己受容尺度、及び(7)希望を構成する項目群から構成された。これらは、一冊の冊子として、綴じられていた。

(1) フェイスシート：調査実施日、年齢、学年、所属学部、及び性別の記入を求めた。

(2) 対自的対他的安心感を構成する項目群：「安心感」は、他者との比較を意識することなく、また、自分に誇れるところがあるかどうかを問うことなく、すなわち、自分の価値の有無とは無関係に、自分の存在自体に安心している感覚、及びこの自分という価値とは無関係な存在が、そのまま他者に抱かれているという感覚、すなわち、他者との利害を超えた「つながりの感覚」から構成されていると仮説した。そして、前者を対自的安心感とし、後者を対他的安心感とした。その上で、対自的安心感を示す項目として、6項目、すなわち、①みんなが見ている前で失敗しても、自分をそのまま受け入れることができる、②ほかの人と違っているところのある自分が、むしろ好ましいと思う、③人間関係でうまくいかなくても、それを自分の一部分として受け入れることができる、④自分の短所は、一方で自分の長所だと思う、⑤ときどき、“世界に自分という存在は一人しかいないのだなあ”と感慨にふけることがある、⑥自分のありのままを見せて、人に嫌われても、仕方がないと思う、対他的安心感を示す項目として、5項目、すなわち、①仲間と一緒にいるとほっとする、②自分は人の役に立っていると思う、③まわりの人にうれしいことがあると、自分もうれしくなる、④もし、自分がいなくなったら、まわりの人は悲しむと思う、⑤みんなの中にいても、ひとりぼっちだと感じることが多い(逆転項目)、計11項目を試作した。これらの項目には、自己受容との類似性が指摘されたり、自分の価値と無関係かどうかが疑われる項目を含んでおり、問題点も少なくないが、試行的に検討を深める素材とすることにした。

(3) 自尊感情尺度：Rosenberg(1965)が開発した自尊感情尺度項目が採用された。ただし、本研究では、山本ら(1982)がリッカート尺度として作成した日本語版が用いられた。評定は、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階評定に変更されており、逆転項目を逆転した後、各項目に1点～5点が与えられた。自尊感情の基底にも、対自的対他的安心感があると想定しているので、対自的対他的安心感と自尊感情の間には正の相関があると考えられた。なお、関連性の検討に際しては総得点を用いることにした。

(4) 社会的比較志向性尺度：Festinger(1954)が、社会的比較(social comparison)の志向性に個人差があることを提起して以来、多数の研究が蓄積されてきた。ここでは、Gibbons & Buunk(1999)によって作成された11項目の社会的比較志向性尺度を、外山(2002)が邦訳した項目群を用いた。評定は、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5段階で行われ、逆転項目を逆転した後、各項目に1点～5点が与えられた。社会的比較が行われた後、たとえ自己が劣位にあるとしても、対自的対他的安心感を持つことがあると想定することは可能であるが、通常、対自的対他的安心感のなかにいる個人は、社会的比較志向性を持たないと考え、両者の間に負の相関があると予想した。なお、外山(2002)やGibbons & Buunk(1999)において、能力比較と態度比較の2因子が見出されているが、オランダやアメリカで1因子解でも検討されているため、関連性の検討に際しては、ここでも総得点を用いることにした。

(5) 楽観主義尺度：楽観主義傾向の個人差を測定するためにScheier & Carver(1985)によって開発されたLife Orientation Testを、中村ら(2000)が邦訳した尺度を用いた。この尺度は、2因子が想定されており、「楽観的自己感情」因子の4項目、「悲観的自己感情」因子の4項目、及びフィラー項目の4項目、計12項目から成っている。

評定は、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの５段階で行われ、各項目に１点～５点が与えられた。なお、関連性の検討に際しては、「楽観的自己感情」と「悲観的自己感情」の２つの総得点が用いられた。対自的対他的安心感と楽観主義とは正の相関が、対自的対他的安心感と悲観主義とは負の相関が、それぞれ予測された。

（６）自己受容尺度：山田(2003)が作成した６項目からなる尺度を使用した。「今のあなた自身のこと」について、現在どのように思っているかを問うものであり、３因子各２項目、すなわち、「志向性」因子(考え方項目と生き方項目)、「対人性格」因子(明るさ項目と協調性・社交性項目)、及び「身体魅力」因子(性的能力(魅力)項目と顔立ち項目)から構成された。なお、評定は、「それではまったくいやだ、気に入らない」、「それでは少しいやだ、少し気になる」、「どちらでもない、わからない」、「それでまあまあよい、それでかまわない」、及び「それでまったくよい、そのままでかまわない」までの５段階で行われ、１点から５点が与えられた。なお、関連性の検討に際しては、自己受容６項目の総得点とともに、「志向性」、「対人性格」、及び「身体魅力」の３つの総得点を用いることにした。対自的対他的安心感とこれらの総得点との間には、いずれも正の相関が予測された。

（７）希望を構成する項目群：試行的に希望尺度の構成を試みた。北村(1983)の定義的表現に基づく希望として、自分の将来についてのイメージを測定しようとした。すなわち、「わたしの10年後」という刺激句に対して、＜あかるい－くらい＞などの27項目の形容語対を調査への協力者に提示して、それぞれについて、「とても」(あかるい)、「かなり」(あかるい)、「やや」(あかるい)、「どちらでもない」、「やや」(くらい)、「かなり」(くらい)、及び「とても」(くらい)の7段階のどこに位置するか回答を求めた。自分の将来についての感情を評定するに際して、大橋(2002a)が用いたリッカート法よりも、SD法の方が、より適切であると判断したからである。形容語対の選択に際しては、井上・小林(1985)などを参照した。Osgood(1957)によれば、これらの形容語は、評価(evaluation)、力量性(potency)、及び活動性(activity)の３つの側面から成り立つと考えられている。このうち、北村の定義的表現に対応するのは、評価の側面である。「わたしの10年後」イメージ、すなわち、「希望」の評価の側面は、対自的対他的安心感によって規定されると予測された。

３.調査期日と手続き

教育学部に在籍する調査への協力者ついては、2006年７月６日の大学の講義終了時に説明を加えて調査用冊子を配布し、１週間後の13日と２週間後の20日に回収した。工学部、理学部、及び農学部に在籍する調査への協力者ついては、2006年10月27日の講義終了時に説明を加えて調査冊子を配布し、３週間後の11月17日と４週間後の24日に回収した。

結　　果

１．対自的対他的安心感尺度の作成

対自的対他的安心感に関する11の調査項目の得点を標準得点化した後、主因子法による因子分析を行った。固有値１以上の３因子が抽出されたが、第３因子に負荷する項目が１項目であり、第２因子から第３因子にかけての固有値の減衰が大きかったので、２因子解を採用してプロマックス回転を行った。次いで、共通性と因子負荷量が低い(.057と .225)項目「ときどき、“世界に自分という存在は一人しかいないのだなあ”と感慨にふけることがある」、及び２つの因子に負荷している項目「自分は人の役に立っていると思う」の２項目を削除して、再度主因子法による因子分析と２因子解によるプロマックス回転を行った。表１は、最終的に２つの因子を構成する項目として抽出された９項目の素点の平均得点を、表２は、因子分析結果を示したものである。第１因子は、「人間関係でうまくいかなくても、それを自分の一部分として受け入れることができる」など５項目から成っているところから対自的安心感因子と、第２因子は、「仲間と一緒にいるとほっとする」など４項目から成っているところから対他的安心感因子と、それぞれ命名された。α係数は、第１因子が.635であり、第２因子が.609であった。十分な信頼性を得ることができなかったが、尺度開発過程では許容範囲にある(Nunnally, 1978: Chan & Sachs, 2001)と判断して、このまま検討を続けることにした。なお、第１因子と第２因子の相関は.236であった。

表１　対自的対他的安心感尺度の各項目の平均得点（M）と標準偏差（SD）

尺　度　項　目	男性 M	男性 SD	女性 M	女性 SD	全体 M	全体 SD
人間関係でうまくいかなくても、それを自分の一部分として・・・	3.35	1.11	3.21	1.19	3.28	1.15
ほかの人と違っているところのある自分が、むしろ好ましいと思う	3.80	1.05	3.75	1.05	3.77	1.05
自分の短所は、一方で自分の長所だと思う	3.01	1.25	3.05	1.27	3.03	1.25
自分のありのままを見せて、人に嫌われても、仕方がないと思う	3.72	1.07	3.60	1.22	3.66	1.14
みんなが見ている前で失敗しても、自分をそのまま受け入れ・・・	3.25	1.16	3.18	1.12	3.22	1.14
仲間と一緒にいるとほっとする	3.87	1.01	4.00	0.99	3.93	1.00
もし、自分がいなくなったらまわりの人は、悲しむと思う	3.50	1.08	3.76	0.96	3.62	1.03
まわりの人にうれしいことがあると、自分もうれしくなる	3.83	0.99	4.19	0.95	4.00	0.98
＊みんなの中にいても、ひとりぼっちだと感じることが多い	3.22	1.14	3.09	1.17	3.16	1.16

注）＊は逆転項目である。

表２　対自的対他的安心感項目の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

尺度名	項　目　内　容	第１因子	第２因子	共通性
対自的安心	人間関係でうまくいかなくても、それを自分の一部分として・・・	.643		.389
	ほかの人と違っているところのある自分がむしろ好ましいと思う	.497	.132	.309
	自分の短所は、一方で自分の長所だと思う	.492		.219
	自分のありのままを見せて、人に嫌われても、仕方がないと思う	.462		.198
	みんなが見ている前で失敗しても、自分をそのまま受け入れ・・・	.452	.112	.251
対他的安心	仲間と一緒にいるとほっとする	−.163	.703	.442
	もし、自分がいなくなったらまわりの人は、悲しむと思う		.551	.295
	まわりの人にうれしいことがあると、自分もうれしくなる	.226	.489	.365
	＊みんなの中にいても、ひとりぼっちだと感じることが多い		.384	.154
	2　乗　和	1.536	1.388	

注）＊は逆転項目である。

対自的安心感尺度を構成する5項目の素点を加算し平均得点と標準偏差(カッコ内)を算出したところ、男性17.13(3.38)、女性16.79(3.93)、全体16.97(3.65)となった。また、対他的安心感尺度4項目を加算した平均得点と標準偏差は、男性14.41(2.94)、女性15.04(2.67)、全体14.71(2.83)となった。いずれも、性差は認められなかった。

２．自尊感情尺度、社会的比較志向性尺度、楽観主義尺度、及び自己受容尺度

（１）自尊感情尺度：原尺度は、リッカート尺度ではないが、１因子である。逆転項目の得点を逆転し、標準得点に変換した後、主成分分析を行った。９項目の第１主成分の負荷量の絶対値は.55以上あったが、１つの項目「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の負荷量は.13であった。このため、負荷量が極端に低い1項目を除外し、９項目の総得点を求めて、以後の検討を進めることにした。なお、α係数は.839であり、十分な信頼性が認められた。自尊感情尺度9項目の素点を加算して平均得点と標準偏差(カッコ内)を算出したところ、男性29.44(6.51)、女性30.11(6.22)、全体29.76(6.37)となった。ここでも性差は示されなかった。

（２）社会的比較志向性尺度：逆転項目の得点を逆転し、標準得点に変換した後、主成分分析を行った。１つの項目「他の人とお互いの意見や経験について話すのが好きだ」の負荷量が.26であった以外は、第１主成分の負荷量は、最低でも.51であった。そこで、負荷量が極端に低い１項目を除外し、10項目の総得点を求めて、以後の検討を進めることにした。なお、α係数は.838であり、十分な信頼性が認められた。社会的比較志向性尺度10項目の素点を加算して平均得点と標準偏差(カッコ内)を算出したところ、男性32.58(7.37)、女性34.10(7.22)、全体33.30(7.33)となった。ここでも性差は示されなかった。総得点について、外山と同様、欧米より高いとは言えず、むしろ低かった。この尺度において、能力比較の比重が高いことが影響している可能性がある。

（３）楽観主義尺度：既存の尺度項目をそのまま使用した。「楽観的自己感情」4項目、及び「悲観的自己感情」4項目の素点を加算して平均得点と標準偏差(カッコ内)を算出したところ、それぞれ、男性12.08(3.01)、女性12.10(2.81)、全体12.09(2.91)、及び男性12.06(2.70)、女性12.75(2.61)、全体12.39(2.67)、となった。「楽観的自己感情」には性差が認められなかったが、「悲観的自己感情」には性差($t(255)=-2.07$, $P<.05$)があり、女性の得点が男性より高かった。なお、α係数は、「楽観的自己感情」で.503、「悲観的自己感情」で.473に留まり、高いとは

言えなかった。また、両尺度の相関は.367で正の相関があった。

（4）自己受容尺度：山田(2003)の6項目から成る自己受容尺度の総得点を用いて、相関等の検討が行われた。主成分分析を行ったところ、いずれの項目も第1主成分の負荷量が高く、最低でも.56であり、一次元構造が成り立った。α係数は.760で、信頼性も認められた。6項目の素点を加算して平均得点と標準偏差(カッコ内)を算出したところ、男性18.19(4.63)、女性18.99(4.05)、全体18.57(4.37)となった。ここでも性差は示されなかった。当初、下位尺度の志向性、対人性格、及び身体魅力についても検討する予定であったが、α係数が、それぞれ.556、.738、及び.671であったことも考慮し、総得点のみを問題にすることにした。

3．希望尺度の構成

「わたしの10年後」について評定した27の形容語対、すなわち、希望に関する27の形容語対の得点を標準得点に変換した後、主因子法による因子分析を行った。

当初、固有値1以上の6因子解でプロマックス回転を行ったが、重複して負荷している項目や因子負荷量の低い項目を除いていくと、第6因子が1項目になったり、第3因子が2項目になるなど、因子を構成する項目の十分なまとまりが得られなかった。5因子解についても同様であった。次いで、4因子解を試みたが、第3因子が2項目で構成されること、第3因子と第4因子間で、固有値の減衰が大きいと判断されたこと、オスグッドらがSD法では一般に3因子解が導かれるとしていることから、3因子解を採用することにし、因子分析の後、プロマックス回転を行った。そこでも、因子負荷量の低い項目や2つの因子に重複して負荷している項目を除去していき、最終的に、残された項目群からなる3つの下位尺度が構成された。途中で除去された項目は、「たかいーひくい」、「大人っぽいー子どもっぽい」、「近いー遠い」、「にがいーあまい」、「疲れたー元気な」、「つめたいーあたたかい」、「おもいーかるい」、「強いー弱い」、及び「はっきりしたーぼんやりした」であった。表3は、18項目から成る最終的な因子分析結果及び各項目の平均得点(素点)と標準偏差を示したものである。何が逆転項目かを判断するのが困難な項目もあったが、逆転項目を逆転した後に、因子分析が行なわれ、プロマックス回転がなされた。構成される項目の内容から、第1因子は、評価、第2因子は、力量性、及び第3因子は、活動性、と命名された。第2因子と第3因子は、両者が混在している項目が含まれている。しかし、希望は、第1因子であると考えれば、第2因子と第3因子を構成する項目の混在は許容されると判断した。α係数は、第1因子(11項目).917、第2因子(4項目).773、及び第3因子(3項目).582であり、第1因子と第2因子の信頼性は示されたが、第3因子の信頼性は十分ではなかった。第1因子と第2因子間の相関は.646、第1因子と第3因子間の相関は−.289、及び第2因子と第3因子間の相関は−.243であった。

評価尺度を構成する11項目の素点を加算し平均得点と標準偏差(カッコ内)を算出したところ、男性53.87(10.89)、

表3　希望尺度を構成する項目の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）及び平均得点（M）と標準偏差（SD）

尺度名	項　目　内　容	第1因子	第2因子	第3因子	共通性	M	SD
評価	愉快なー不愉快な	.891	−.107		.718	5.16	1.14
	あかるいーくらい	.850			.680	5.19	1.25
	よいーわるい	.810			.674	5.22	1.20
	たのしいーくるしい	.751			.559	5.19	1.32
	すきなーきらいな	.750			.604	5.18	1.18
	うつくしいーみにくい	.678			.501	4.61	1.15
	安定したー不安定な	.666			.504	5.27	1.24
	頼もしいー頼りない	.649	.287	.204	.681	5.17	1.22
	新しいー古い	.517		.125	.238	4.48	1.31
	＊つまらないーおもしろい	.461	.235	−.102	.458	5.12	1.34
	やわらかいーかたい	.449		−.337	.356	4.78	1.29
力量性	＊小さいー大きい	−.129	.977		.800	4.75	1.16
	＊せまいーひろい		.673	−.168	.603	4.85	1.21
	＊臆病なー勇敢な	.181	.466		.381	4.57	1.30
	＊おそいーはやい	.104	.465		.272	4.49	1.14
活動性	でしゃばりなーひかえめな	.234		.619	.355	3.97	1.16
	はげしいーおだやかな		−.123	.572	.372	3.40	1.49
	きびしいーやさしい	−.148		.530	.333	3.71	1.50
	2　乗　和	6.769	4.750	1.865			

注）＊は逆転項目を示している。

女性56.98(8.72)、全体55.34(10.02)となった。力量性尺度4項目を加算した平均得点と標準偏差は、男性18.36(4.20)、女性19.00(3.07)、全体18.67(3.71)となった。また、活動性尺度3項目を加算した平均得点と標準偏差は、男性11.41(3.32)、女性10.72(2.76)、全体11.08(3.08)となった。評価尺度には性差(t=−2.54, df=251.39, P<.05)があり、女性の得点が男性より高かった。また、力量性には性差が認められなかったが、活動性には、男性の得点が女性より高い傾向(t=1.79, df=255, P<.1)があった。

4．対自的対他的安心感尺度と自尊感情尺度・社会的比較志向性尺度・楽観主義尺度・自己受容尺度との関連

(1) 対自的対他的安心感尺度と自尊感情尺度・社会的比較志向性尺度・楽観主義尺度・自己受容尺度との相関

各尺度間の相関を示したのが、表4である。対自的安心感と対他的安心感は、自尊感情、楽観主義、悲観主義、及び自己受容と正の相関を示していた。対自的安心感と社会的比較志向性の間には、負の相関が示されたが、対他的安心感と社会的比較志向性との間には、相関が示されなかった。当初の予測と異なっていたのは、対自的安心感と対他的安心感が、悲観主義と正の相関を示したこと、及び対他的安心感と社会的比較志向性との間に相関が認められなかったことである。

表4　対自的対他的安心感尺度と自尊感情尺度・社会的比較志向性尺度・楽観主義尺度・自己受容尺度の相関

尺　度	自尊感情	比較志向性	楽観主義	悲観主義	自己受容
対自的安心感	.378***	−.195**	.328***	.170**	.298***
対他的安心感	.559***	.047	.412***	.380***	.388***

注）***はP<.001を、**はP<.01を示している。

(2) 自尊感情尺度、社会的比較志向性尺度、楽観主義尺度、及び自己受容尺度の規定因としての対自的安心感尺度と対他的安心感尺度

対自的安心感と対他的安心感が、自尊感情、社会的比較志向性、楽観主義、悲観主義、及び自己受容の基底にあるとする考え方に基づき、自尊感情、社会的比較志向性、楽観主義、悲観主義、及び自己受容を基準変数とし、対自的安心感と対他的安心感、及び性別を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行なった。表5は、その結果を示したものである。自尊感情、楽観主義、及び自己受容を、対他的安心感と対自的安心感の両方が規定しており、社会的比較志向性を、対自的安心感のみが、悲観主義を、対他的安心感のみが、それぞれ、規定していることが示された。全体として、対他的安心感の規定度が強いこと、及び相対的に、社会的比較志向性の規定される程度が弱いことなどが認められた。

表5　自尊感情尺度、社会的比較志向性尺度、楽観主義尺度、及び自己受容尺度の規定因の検討

	Step 1		Step 2	
変　数	F	β	F	β
自尊感情				
対他的	115.68*** R^2=.31	.56***		.50***
対自的			76.54*** R^2=.38	.26***
比較志向				
対自的	10.08** R^2=.04	-.20**		
自己受容				
対他的	45.33*** R^2=.15	.39***		.34***
対自的			30.93*** R^2=.20	.22***
楽観主義				
対他的	52.02*** R^2=.17	.41***		.35***
対自的			37.02*** R^2=.23	.24***
悲観主義				
対他的	43.05*** R^2=.14	.38***		

注）***はP<.001を、**はP<.01を示している。

5．希望尺度と対自的対他的安心感尺度の関連、及び希望尺度と自尊感情尺度・社会的比較志向性尺度・楽観主義尺度・自己受容尺度との関連

(1) 希望尺度と対自的対他的安心感尺度の相関

希望(評価)尺度と対自的安心感尺度・対他的安心感尺度の相関(それぞれ、r=.253, P<.001; r=.303, P<.001)は有意であった。希望(力量性)尺度と対自的安心感尺度・対他的安心感尺度の相関(それぞれ、r=.368, P<.001; r=.218, P<.001)も有意であったが、希望（活動性）尺度と対自的安心感尺度・対他的安心感尺度の相関は有意でなかった。

(2) 希望尺度の規定因としての対自的安心感尺度、対他的安心感尺度、及び性別

希望を基準変数、対自的安心感、対他的安心感、及び性別を説明変数として、重回帰分析を行った結果を示したのが、表6である。

表６　希望尺度の規定因としての対自的安心感尺度、対他的安心感尺度、及び性別

変　数	Step 1 F	Step 1 β	Step 2 F	Step 2 β	Step 3 F	Step 3 β
希望・評価						
対他的安心感	25.76***	.30***		.26***		.24***
	R^2=.09					
対自的安心感			18.42***	.19**		.20**
			R^2=.13			
性別					14.31***	.14*
					R^2=.15	
希望・力量性						
対自的安心感	39.93***	.37***		.34***		
	R^2=.14					
対他的安心感			23.06***	.14*		
			R^2=.15			

注）***はP＜.001、**はP＜.01、*はP＜.05を、それぞれ、示している。

希望(評価)は、対他的安心感、対自的安心感、及び性別に規定されていること、また、希望(力量性)は、対自的安心感、及び対他的安心感に規定されていることが示された。一方、希望(活動性)は、ここで取り上げた説明変数には規定されていなかった。

（３）希望尺度と自尊感情尺度・社会的比較志向性尺度・楽観主義尺度・自己受容尺度との相関

希望と自尊感情・社会的比較志向性・楽観主義・悲観主義・自己受容との相関を示したのが、表７である。希望(評価)と希望(力量性)に関しては、いずれも、自尊感情・楽観主義・悲観主義・自己受容との間に、正の相関が示されたが、社会的比較志向性との間には、相関が認められなかった。希望(活動性)に関しては、ここで取り上げられた尺度との間に、全て相関が認められなかった。

表７　希望尺度と自尊感情尺度、社会的比較志向性尺度、楽観主義尺度、及び自己受容尺度との相関

尺　度	自尊感情	比較志向性	楽観主義	悲観主義	自己受容
希望・評価	.366***	.041	.365***	.269***	.261***
希望・力量性	.319***	.006	.263***	.189**	.200**
希望・活動性	.093	−.062	.040	.009	−.062

注）***はP＜.001を、**はP＜.01を示している。

（４）希望尺度の規定因としての自尊感情尺度、社会的比較志向性尺度、楽観主義尺度、及び自己受容尺度

希望(評価)、希望(力量性)、及び希望(活動性）を基準変数とし、自尊感情、社会的比較志向性、楽観主義、悲観主義、及び自己受容を説明変数とする重回帰分析を行なったところ、表８の結果が得られた。すなわち、希望(評価)と希望(力量性)は自尊感情と楽観主義に規定されていたが、希望(活動性)はこれらの尺度に規定されていなかった。

表８　希望の規定因としての自尊感情、社会的比較志向性、楽観主義、悲観主義、及び自己受容の検討

変　数	Step 1 F	Step 1 β	Step 2 F	Step 2 β
希望・評価				
自尊感情	39.43***	.37***		.25***
	R^2=.13			
楽観主義			28.68***	.25***
			R^2=.18	
希望・力量				
自尊感情	28.96***	.32***		.25***
	R^2=.10			
楽観主義			17.29***	.15*
			R^2=.12	

注）***はP＜.001を、*はP＜.05を示している。

６．希望の規定因についての全体的検討

北村(1983)の定義的表現を採用すると、希望は、ここで採用した希望尺度の下位尺度の評価に該当する。そこで、希望(評価)の規定因を、全体として検討することにした。まず、結果５(２)から、希望(評価)が、対他的安心感、対自的安心感、及び性別から直接規定されていることがわかる。次いで、５(４)から、希望(評価)が、自尊感情と楽観主義によって規定されていることが示されている。また、４(２)には、自尊感情と楽観主義が、対自的安心感と対他的安心感に規定されていること、また、社会的比較志向性が対自的安心感から、悲観主義が対他的安心感から、それぞれ、規定されていること、も示されている。

これらの結果を総合的に検討すると、対他的安心感と対自的安心感、及び性別が、直接的に希望を規定すると同時に、対他的安心感と対自的安心感は、自尊感情と楽観主義を介して、間接的に希望を規定するという枠組みが仮定される。この図式のもとに、AMOS(7.0)(Arbuckle／井上監訳、2006)によってパス解析を行なったところ、図１の結果が得られ、このモデルが成立した。モデル適合度の指標は、カイ自乗検定結果(χ^2=5.439, df=4, P=.245)が有意でなく、GFI=.993、AGFI=.963、RMSEA=.037であった。これらの指標は、いずれもモデルが適合していることを示していた。

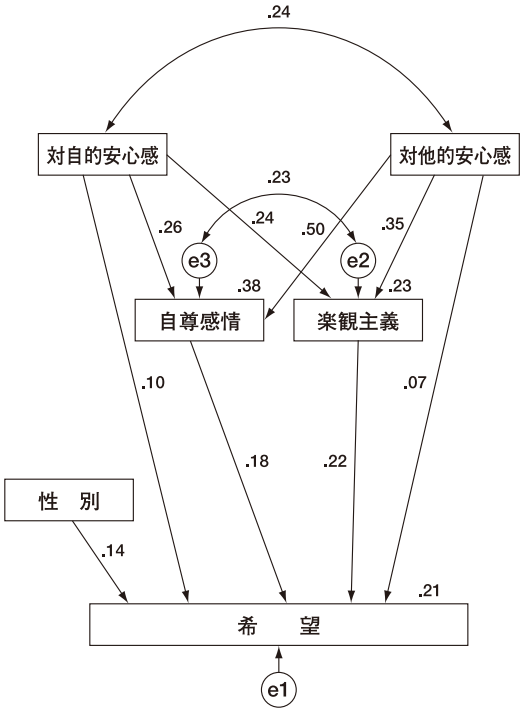

図１　希望の規定因の全体的構造

要約的討論

地方都市の大学生を対象に調査を実施し、対自的対他的安心感尺度の作成を試みた。また、北村(1983)の定義的表現に基づく希望尺度の作成をも試みた。その上で、この対自的対他的安心感が、希望の直接的規定因に成り得るかどうかを検討した。加えて、この対自的対他的安心感が、自尊感情、社会的比較志向性、楽観主義、悲観主義、及び自己受容を介して、希望を間接的に規定するかどうかを吟味した。その結果、ここで作成された対自的対他的安心感は、北村の考え方に基づいて作成された希望を、直接的に規定すると同時に、自尊感情や楽観主義を介して、間接的にも規定することが示された。しかし、今後検討されなければならない課題として、次に挙げる問題点もまた明らかにされた。

（１）対自的対他的安心感尺度を洗練する必要性

暫定的な対自的安心感尺度と対他的安心感尺度を構成したが、ここで採用された項目群が、価値とは無関係な「自己の存在自体を受け容れる感覚」と「他者とのつながりの感覚」を反映したものであるかどうか、を吟味する必要がある。また、尺度開発過程では許容されるとして、α係数で示される信頼性が低いにもかかわらず、検討を続行した。各尺度に含まれる項目数を増やすなどして、信頼性を高める方途を探究しなければならない。さらには、ここで採用された暫定的な尺度の構成概念妥当性が一応認められるとして処理したが、疑問点も残されている。２つの尺度と自尊感情や楽観主義や自己受容が正の相関を持つこと、及び対自的安心感と社会的比較志向性が負の相関を持つことは予測されたが、２つの尺度と悲観主義が正の相関を持ち、対他的安心感が社会的比較志向性と相関を持たないことについては想定されていなかった。悲観主義との関連については、項目内容に目を向ける必要があるかもしれない。悲観的自己感情を構成する「自分に都合よくことが運ぶだろうなとは期待しない」、「自分の身に思いがけない幸運が訪れるのを当てにすることは、めったにない」などの項目は、ありのままを受け容れる安心感と共通する側面を持っていると解することも可能である。社会的比較志向性との関連については、対他的安心感があるので社会的比較志向性のない人もいれば、対他的安心感があっても社会的比較をする人もいる、あるいは社会的比較をした上でもなお対他的安心感を持つ人もいる、と説明できるであろうか。今後の検討課題である。

（２）対自的対他的安心感と希望を媒介すると位置づけた尺度の再検討

この研究では、自尊感情、社会的比較志向性、楽観主義、悲観主義、及び自己受容を、対自的対他的安心感と希望を媒介する変数として位置づけた。自尊感情については、価値の色彩を帯びた項目があるにもかかわらず、予測通り、媒介的役割を果たしていた。「わたしの10年後」の明るさは、今日の社会的背景のなかで、一定の価値的基盤が支えているとも読めるのである。また、自尊感情は対自的対他的安心感によって支えられているという結果でもあった。価値的側面と対自的対他的安心感の関連は、さらに検討を深める余地がある。社会的比較志向性については、当初の予測とは異なり、対自的対他的安心感と希望をつなぐ媒介とはならなかった。能力比較の項目の多い社会的比較志向性がなぜ対自的対他的安心感や希望と明確な負の関連を示さないかについて、ここでは明らかにされていない。楽観主義と悲観主義については、楽観主義と悲観主義が正の相関を持ち、楽観主義が対自的対他的安心感と希望をつなぐ媒介となってい

た。楽観主義の媒介的役割は予測されるものであったが、楽観主義と悲観主義がなぜ正の相関を持つのか、対自的対他的安心感と楽観主義は何によって区別されるのかなど、残された課題は少なくない。楽観主義と悲観主義尺度の信頼性が高くないところも気になる点である。自己受容については、当初の予測とは異なり、自己受容が対自的対他的安心感及び希望と正の相関を持つにもかかわらず、対自的対他的安心感と希望をつなぐ役割を担っていなかった。自己受容は、対自的対他的安心感に規定されていたが、希望は自己受容に規定されていなかったのである。希望とは他者とのかかわり抜きに語れないものであるのか、採用した自己受容尺度に問題があるのかなど、この原因について今後明らかにしていく必要がある。

（３）提出した希望尺度及び希望の規定因の全体的構造についての再吟味

この研究では、「希望は来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情である」との立場から、SD法によって得られた「わたしの10年後」のイメージの評価因子を希望とした。「わたしの10年後」のイメージから希望を引き出すことが適切であるかどうかを検討する必要がある。「来るべき未来」とは果たして10年後であろうか。はるか彼方をイメージする方が妥当であるかもしれない。はるか彼方には明るさがあるが、わたしの10年後は、そこへ向けての労苦の日々であるかもしれない。「わたしの人生」などと、より遠い未来のイメージを刺激語に選択する必要があるかもしれないのである。

また、希望の規定因の全体的構造を描いたのであるが、既に述べてきたように、対自的対他的安心感の項目群を洗練することによって、全体的構造を再構成し直すことが求められるかもしれないし、また、たとえば、自己受容などの媒介変数の内容を変えることによって、異なる結果が生まれるかもしれない。さらには、ここでは取り上げられなかった多様な要因を、希望に重要な影響を与えるものとして、吟味していくことが求められるかもしれないのである。

いずれにしても、この研究は、対自的対他的安心感、あるいは、希望の規定因の探究に対して、端緒的な一歩としての位置づけが与えられるのである。

文　献

Arbuckle, J.L.／井上哲浩監訳　2006　Amos 7.0Jユーザーズガイド　エスピーエスエス株式会社

Chan, C. K. K., & Sachs, J. 2001 Beliefs about Learning in Children's Understanding of Science Texts. *Contemporary Educational Psychology, 26,* 192－210.

遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽　1992　セルフ・エスティームの心理学　ナカニシヤ出版

Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle（ selected papers of E.H. Erikson ）.* New York: Int. Univ. Press.（エリクソン,E. H.／小此木啓吾（編訳）　1973　自我同一性ーアイデンティティとライフスタイル　誠信書房）

エリクソン, E.H.・エリクソン, J.M.／村瀬孝雄・近藤邦夫訳　2001　ライフサイクル、その完結＜増補版＞　みすず書房

Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations, 7,* 117－140.

深谷昌志（監）　2001　モノグラフ・中学生の世界VOL70　中学生の悩み　福武書店

Gibbons, F.X., & Buunk, B.P. 1999 Individual difference in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology, 76,* 129－142.

樋口善之・松浦賢長　2002　自己肯定感の構成概念および自己肯定感尺度の作成に関する研究　母性衛生, 43(4), 500－504.

樋口善之・松浦賢長　2003　大学生における自己肯定感と生活習慣の関連に関する研究　福岡県立大学看護学部紀要, 1, 65-70.

井上正明・小林利宣　1985　日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観　教育心理学研究, 33, 253－260.

河地和子　2003　自信力はどう育つかー思春期の子ども世界4都市調査からの提言　朝日新聞社

北村晴朗　1983　希望の心理ー自分を生かす　金子書房

今野芳子　2001　自己をコントロールする力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方　平成12年度教育資料第２号（京都府総合教育センター）, 1－160.

文部省（編）　1996　21世紀を展望した我が国の教育の在り方について　ぎょうせい

中村陽吉（編著）　2000　対面場面における心理的個人差―測定の対象についての分類を中心にして　ブレーン出版

日本青少年研究所　2001　新千年生活と意識に関する国際比較調査（8月1日付朝日新聞）

日本青少年研究所　2002　日米中高校生比較調査（6月3日付愛媛新聞）

Nunnally,J.C. 1978 *Psychometric theory.* New York: McGraw Hill.

大橋明　2002a　Herth Hope Scale 日本語版の作成および信頼性・妥当性の検討　老年精神医学雑誌, 13, 1187－1194.

大橋明　2002b　高齢者の希望とその関連要因に関する研究　大阪大学人間科学部行動学専攻／大阪大学大学院人間科学研究科行動学専攻　卒業・修士・博士論文要約集ー平成13年度, 1－4.

Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H. 1957 *The measurement of meaning.* Urbana: University of Illinois Press.

Rogers, C.R. 1951 *Client-centered therapy.* Boston: Houghton Mifflin.（ロジャーズ, C.R.／友田不二男訳　1965　ロージャズ選書２精神

療法(９版)　岩崎書店)
Rogers, C.R. 1959 A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed.) *Psychology: A study of science. Vol.3,* New York: McGraw-Hill.(ロジャーズ,C.R.／伊東博編訳　1966　ロージャズ全集４　セラピィ・パーソナリティ・対人関係の理論・サイコセラピィの過程　岩崎学術出版社)
Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image.* Princeton: Princeton University Press.
Scheier, M.F., & Carver, C.S. 1985 Optimism, coping, and health: Assessment and implications of generalized outcome expectancies. *Health Psychology, 4,* 219－247.
高垣忠一郎　2004　生きることと自己肯定感　新日本出版社
高垣忠一郎　2006　「自己愛」と「自己肯定感」から考える子育てにおける「平和」と「暴力」　心理科学, 26(2), 48－58.
高橋あつ子　2002　自己肯定感促進のための実験授業が自己意識の変化に及ぼす効果(実践研究)　教育心理学研究, 50, 103－112.
外山美樹　2002　社会的比較志向性と心理特性との関連－社会的比較志向性尺度を作成して－　筑波大学心理学研究, 24, 237－244.
上田琢哉　1996　自己受容概念の再検討－自己評価の低い人の“上手なあきらめ”として－　心理学研究, 67(4), 327－332.
上原行義　2005　平成17年度教育プラン「厳しく育て、自己肯定感をもたせましょう」　品川区立小山小学校だより　４月６日号
VandenBos, G. R. (Ed.) 2006 *APA Dictionary of Psychology.* American Psychological Association.
渡辺弘純　2003　現在と未来に対する考え方・感じ方：遼寧師範大学附属中学生と愛媛大学教育学部附属中学生の比較　渡辺弘純(代表)　平成14年度愛媛大学学長裁量経費報告書, 123－146.
渡辺弘純・武勤・Crystal, D.・渡邉俊　2004　中国の児童生徒における希望、信頼、寛容の発達とその相互的関連　愛媛大学教育学部紀要, 51(1), 17－27.
渡辺弘純　2005　希望の心理学を再考する－研究覚書－　愛媛大学教育学部紀要, 52(1), 41－50.
Watanabe, H., & Crystal, D. 2006 Relations among hope, trust, and tolerance for human diversity: A comparison of Japanese and American adolescents. Presented at *the 26th International Congress of Applied Psychology,* Athens, Greece.
山田みき　2003　大学生における自己受容尺度作成の試み－自己による自己受容と他者による自己受容の統合として－　愛媛大学教育学部卒業論文(未公刊)
山本眞理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, 30, 64－68.